

小説

吉屋信子

萩市
(1896～1973)



提供・日本近代文学館

【著作】

『花物語』（大正9・洛陽堂）
『良人の貞操』（昭和12・新潮社）
『安宅家の人々』（昭和27・毎日新聞社）ほか

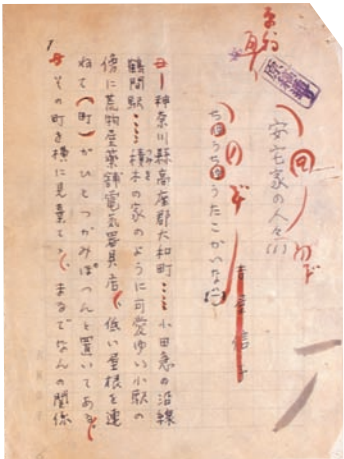
吉屋信子は、多くの読者に愛され続ける少女小説『花物語』を執筆した少女小説家であり、また大正期から昭和戦後期に至るまで、常に一線で活躍し続けた流行作家である。『花物語』（初版は大正九年（一九二〇）五月、洛陽堂）は、女学校に学び若き日々を送る少女達の繊細なところを美しい文体で描き出した小説として知られ、現在に至るまで出版社を変えつつも版を重ね、新しい読者を獲得し続けているロングセラーとなっている。この時期の吉屋信子は、私小説的な少女小説『屋根裏の二処女』（大正九年（一九二〇）一月、洛陽堂）なども残している。

しかしながら、吉屋信子の五十年に亘る流行作家としての経歴は、大正八年（一九一九）の大阪朝日新聞社主催の長篇懸賞小説募集に、「地の果てまで」で一等当選することから始まる。一等賞金は二千元。かつて文学の世界を憧憬し、投書雑誌に詩や小品を投書する少女時代を送った吉屋信子は、こうして、生涯独身を保ちながら、筆一本の長い作家人生を切り拓いていくスタートラインに立った。以後の吉屋信子の生涯は多忙であった。以後も「海の極みまで」（大正十年（一九二一）、「薔薇の冠」（大正十三年（一九二四）、「暴風雨の薔薇」（昭和五年（一九三〇）、「理想の良人」（昭和八年（一九三三））と、コンスタントに長編小説連載を抱え、昭和十年代には二度に亘って全集および選集が刊行されるほど、多くの読者を持つこととなった。その一方で、同時期に活躍した林芙美子が文壇内からの批評の対象となったのに対し、吉屋信子は通俗小説作家・大衆小説作家として位置づけられていたため、あまり文壇における批評の対象となることはなかった。しかしながら、抑圧された女性の苦悩・葛藤を描く吉屋信子は、多くの女性読者を魅了し続けていった。

戦後になると、「安宅家の人々」（昭和二十七年（一九五二）、「徳川の夫人たち」（昭和四十一年（一九六六）、「続徳川の夫人たち」（昭和四十二年（一九六七）、「女人平家」（昭和四十五年（一九七〇））など、時代小説にも作風の幅を広げ、なかでも「徳川の夫人たち」は昭和四十二年（一九六七）にテレビドラマ化され、多くの視聴者に好評を博した。また、回想録『自伝的女流文壇史』（昭和三十七年（一九六二））は、吉屋信子の文壇的な交遊関係、その作家としての生涯を伺うことができる、大変興味深い資料となっている。

（文・加藤慎行）

【参考文献】『吉屋信子全集』全12巻（朝日新聞社）
『日本近代文学大事典 第三巻』（日本近代文学館・講談社）



「安宅家の人々」冒頭原稿 日本近代文学館蔵



旧蔵品 提供・神奈川近代文学館

吉屋信子 年譜

（提供・加藤慎行）

明治29（一八九六）年	明治41（一九〇八）年	明治44（一九一）年	明治45（一九一）年	大正2（一九一）年	大正3（一九一）年	大正5（一九一）年	大正6（一九一）年	大正8（一九一）年	大正10（一九一）年	大正12（一九一）年	大正14（一九一）年	昭和3（一九一）年	昭和5（一九一）年	昭和10（一九一）年	昭和11（一九一）年	昭和13（一九一）年	昭和15（一九一）年	昭和17（一九一）年	昭和26（一九一）年	昭和27（一九一）年	昭和37（一九一）年	昭和45（一九一）年	昭和48（一九一）年	昭和50（一九一）年
	一二歳	一五歳	一六歳	一七歳	一八歳	二〇歳	二一歳	二三歳	二五歳	二七歳	二九歳	三二歳	三四歳	三九歳	四〇歳	四二歳	四四歳	四六歳	五五歳	五六歳	六六歳	七四歳	七七歳	

1月12日、新潟市営所通の県庁官舎に父雄一、母マサの長女として生まれる。父雄一は萩毛利藩士の子、明倫学舎に学んだ後、官吏となり当時新潟県警務課長。母もまた萩出身であった。佐渡郡長、栃木県芳賀郡長と父は転動し、信子もこれに伴った。栃木高女に入学（現在の栃木女子高校）。樋口一葉の小説や小杉天外『ゴブシ』・木下尚江『良人の自白』などの文学書を読み、雑誌『少女世界』『少女界』などへ投書始める。文芸専門の雑誌『文章世界』『新潮』への投書を始める。栃木高女卒業。上都賀郡長として転動した父に伴い、鹿沼に転居。日光小学校代用教員として一時、家を離れる。夏、大塚宮仲町に帝大生だった兄忠明と下宿し、信子は上京を果たす。幼年雑誌『良友』『幼年世界』編集部に送った童話が採用される。7月、雑誌『少女画報』編集部に送った『花物語』第一話が採用される。引き続き大正13年まで52篇を連載する。12月、最初の単行本として童話集『赤い夢』（洛陽堂）を刊行。12月、『大阪朝日新聞』の長篇懸賞小説募集に「地の果てまで」を応募し一等当選となる（掲載は翌年1月から6月）。7月、『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』に「海の極みまで」連載（12月まで）生涯の友人となる門馬千代と出会う。1月、個人雑誌『黒薔薇』（交蘭社）を創刊（8月、8号まで刊行）。9月、『現代長篇小説全集』（新潮社）の一冊に加えられたため、円本ブームのなか印税二万円を手にし、門馬千代を伴い渡欧（帰国は翌年9月）。同全集の『吉屋信子集』刊行は翌年3月。

1月、『暴風雨の薔薇』を雑誌『主婦之友』に連載（翌年4月まで）。2月、『吉屋信子全集』全一二巻（新潮社）を刊行（翌年2月まで）。10月、『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』に「良人の貞操」を連載（翌年4月まで）。翌年には、同作は映画化・舞台化され大ヒットとなる。9月、『吉屋信子選集』全一一巻（新潮社）を刊行（翌年9月まで）。9月、『主婦之友』特派員として満洲開拓団見学。12月にはインドネシアへ。5月、文学報国会発足。以後、国策宣伝のための見学・旅行・講演・懇談会などに忙殺される。2月、雑誌『婦人公論』に短篇「鬼火」を掲載。8月、『毎日新聞』に「安宅家の人々」を連載（翌年2月まで）。5月、『鬼火』により第四回女流文学者会賞受賞。10月、回想録『自伝的女流文壇史』（中央公論社）を刊行。7月、雑誌『週刊朝日』に「女人平家」を連載（翌年10月まで）。7月11日、死去。戒名は紫雲院香簪信子大姉。鎌倉の墓地に埋葬される。没後、土地・邸宅・蔵書・原稿等が鎌倉市に寄贈され、翌年5月から吉屋信子記念館として開館。

2月、『吉屋信子全集』全12巻（朝日新聞社）が刊行される。（翌年1月まで）

萩に多いものは夏蜜柑の樹の外に、明治維新の偉人の旧宅と寺院である。

吉田松陰生地、伊藤公旧宅、山県有朋旧宅、木戸侯旧宅、品川彌二郎旧宅……等々街の道筋のおちこち、その家がたいていまだ形を存して、碑が立っている。

そして、寺のあちらにも、こちらにも……その一つの蓮池院に雅子の実家の玉木家代々の墓がある。そこに戦死した雅子の兄元陸軍大尉誠の墓もある。

帰郷後の二日目の朝、雅子は母とわが家の後園に咲きかけた夏菊を持って、その墓を訪れた。神経痛で足の運びに悩む母と車で……。

小さい寺ではあるが――藩主毛利家の藩学機関明倫館の創立にあずかった山田原欽の墓や、国史家の文人岡本栖雲、藩主の侍医で江戸在勤中、塙保己一の友だったという賀屋澹園の苔むす墓石が若葉の蔭に静かに立っている。

「うちのお墓のあの松が枯れてきられてしもうたので……眺めがちがうの、雅さん」母のいったとおり、玉木の墓所を覆うた昇竜の形の老松は松食虫のためかその姿を失っていた。

「誠も運のない子……死なんでもいい戦争に殺されて……いまごろぼつぼつ……南の島から助けられて帰る兵隊もあるというに……」

雪江は一人息子の墓の前に……こうしていつも同じ嘆きを繰り返すのだろうか……。その兄が生きていてくれたら……こんどの問題でも……どんなに相談相手になって貰えたかと――雅子は亡き兄のおもかげへの思慕は切ないものだった。

（『安宅家の人々』（毎日新聞社）より）

吉屋信子